

本学LL自習室のライブラリーシステム化

—— 本学の実態 ——

竹 野 茂

1 はじめに

筆者は1993年度の宮崎公立大学人文学部紀要への投稿記事「本学LL自習室のライブラリーシステム化～先進校の実態調査をふまえて～」(以下、前稿)を著し、本学LL自習室の在り方について分析・考察し、いくらかの課題を明らかにした。

1993年度は、本学開学の年であり、当然のことながら、本学LL自習室もそのスタートに立ったところというばかりであった。したがって、その本格的な運営はこれからと言えるが、だからこそLL自習室の在り方について、1993年度の課題にどのように対応してきたかを問いつつ、またさらに今後の展望を開いていきたい。

この稿では前稿ではほとんど触れなかったCALL(Computer Assisted Language Learning)システムについても触れたいと思う。本学のLL自習室は従来型のLL機器を中心にセットアップされている。それもLL用テープレコーダー11台、ビデオデッキ(VCR)3台とそれぞれにモニター、レーザーディスクプレーヤー(LDP)1台とモニター(VCR及びLDPにはキャプション装置を付けている)という極小さな規模でスタートしている。このような規模で将来800人を越す学生のニーズに応えることができるのか危惧するところである。また、巷では1993年米国副大統領ゴア氏提唱による「情報スーパーハイウェイ構想」に端を発した「マルチメディア時代」の到来を告げる記事等がマスコミ報道されてきている。技術の著しい進歩の波に語学教育そのものも大きく変化しようとしている。

アメリカでは、このゴア氏の提唱を待たずしても、各家庭にコンピューターが入り込み、情報ネットワークは網の目のように広がっていた。そして、アメリカの大学教育では語学教育に限らずコンピューターの幅広い利用がなされており、大学間ネットワークも張り巡らされ、コンピューターは研究には不可欠となっている。こうした時代の波に乗り遅れないことが情報化国際社会の中で日本が孤立しないためにも必要になってくる。このようなことも考慮しながら本学LL自習室の在り方を考え直していきたい。

従来のLL自習室はどちらかといえば、学生のための「孤立した」自習空間(Self-Instruction Room)としての役割を果たしてきた。しかし、コンピューター技術の発達によりデジタル通信(Internet等)が身近なものになってきた。LL自習室は「孤立した」空間から、コンピューターを狭義のCALLシステムの形でのみ使用するのではなく、コンピューター通信を使った自己発信空間(Self-Access Room)への転換を迫られてきている。つまり、LL自習室へのコンピューターの導入は必然に迫られていると見てよいであろう。コンピューターを導入した小規模なLL自習室から大規模な「語学学習センター」(Language Learning Center)への発展性も考えていきたい。

広い意味でのCALLシステム(Computer Assisted Language Learning Laboratory System)を英語教育に組み入れることは、英語学習のよい機会が得られることを示しているし、また将来、学生が社会人となった時に職場や家庭等で英語を実用する方法を学ぶことでもあるし、そして一地方から、国際文化に参加し得るという利点も意味している。また、予想としては、新しい世界を開き、視覚にも訴えるというような点から、学生の知的好奇心と興味を引きだし、自主性を引き起こすものとなるだろう。これを実際に英語教育に組み入れれば、その他さまざまな効用が考えられるであろう。これを、英語教育の一方法として捉えるなら、また他の英語学習システムとの補完を考えるなら、そのシステムを常備し使用する場としてLL自習室は最適な環境となるのではないだろうか。

2 1993年度の課題への対応と現状

筆者の前稿において、他大学の視察そしてその際の担当の方々からの示唆より、また学生の意識・要望を把握するためのアンケート等により、本学LL自習室の課題を幾つか明らかにした。それは、大別すると以下のよう
な点であった。

- (ア) 学生にLL自習室の利用法が明確になっていないこと
- (イ) 学生が語学習得のための動機・目標を明確にしていないこと
- (ウ) スタッフの問題
- (エ) 機器の充実の問題
- (オ) その他
 - ・ソフトの管理・運営、整理・分類・検索の問題。
 - ・学生を自主的なLL学習に導くために、英語の各教員同士のコミュニケーションを大事にすることで、個々の学生の到達度・語学レベルに常に関心を払い十分把握し、またLL事務室との密なる連携により、学生の要求に応える。

これらの課題についての対応策と成果、その中からさらに明らかになった課題は、以下のとおりである。

- (ア) 学生にLL自習室の利用法が明確になっていないことについて
 - ・オリエンテーションによるLL自習室の存在のPR
1994年度初めのLLの授業時間に簡単なオリエンテーションを行い、LL自習室の存在を知らしめ、自習室の積極的な利用を呼びかけた。
 - ・しかし、LL自習室の明確な利用法についてのパンフレット等の用意ができず。口頭によるものであったので、全学生の中でまだ一度も自習室を利用していない学生もまだ多数見受けられる。(自習室の利用に際しては利用簿に学籍番号、利用開始時間・終了時間、利用ソフトを記入してもらい、統計を取っている。)
 - ・あらゆる機会をとらえ掲示等で学生に情報を流すよう改善をしたが、まだ徹底しているとは言えない。具体的には、LL自習室・LL実習室に入室すれば、その利用法、使用法がすぐに明らかになるよう、簡潔で分かりやすい掲示を行った。利用法、使用法に限らず、新着のソフトの案内なども、随時掲示した。学内の(LL実習室外の)掲示板にも、同様の掲示を行った。また、部屋のレイアウトを工夫したり、学生が利用しやすい雰囲気作りに努力している。この業務は、主に嘱託職員である矢野女史にお願いしてやってもらっている。細かい作業も多く、思わぬ努力を要する。自習室を利用する学生の反応は、すこぶるよかった。
 - ・LL自習室利用法の手引書の作成については、作成案を練りつつあるが、時間的な問題とスタッフの少なさから、昨年度中に完成するには至らなかった。今後も、利用法の改善も検討しつつ、その完成を目指したい。
 - ・「LL通信」のような広報紙の作成については、他の大学で視察した際に示唆を得たものであるが、やはりスタッフと時間の制約から、実行には移せなかった。スタッフには予算の都合もあるが、興味を持つ学生があれば、製作に参加させるのも、LL学習に対する意識を高める点や、将来教職や、広報関係の仕事につきたい者には体験の一つにもなり得るか、とも考えている。
- (イ) 学生が語学習得のための動機・目標を明確にしていないことについて
 - ・資格試験を本学で受験可能とするということから、本学を会場として英語検定試験を行うことが可能となった。このことにより、試験対策にLL自習室を利用する学生もあった。この試験は、就職時に有利な点となることも考えられる。また、年度途中からではあったが本学教員の協力を得て「英検対策セミナー」を学生の空き時間を考慮しながら実施した。その具体的な成果は、時を待たなければ分からないが、少なくともLL自習を行う動機の一つにはなった。今後は、学生の要望も入れながら、「英検セミナー」については改善をし、強化していきたい。英検のみならず、TOEFL、TOEICについてもセミナーの実施を検討していきたい。これらセミナーの実施においては、教員の協力が不可欠である。幸い英語系の各教員にはLL自習室或いはLL教育に関してよく理解して頂き協力も得られている。今後も教員同士のコミュニケーションの強化を図っていきたい。

- TOEFL, TOEICの本学での実施は、今年度は実現できなかったが、実施できれば、これらの資格試験に対する関心も高まり、受験者の増加も見込まれる。本年度TOEICについては、教材を用意し、任意の希望者に小テストを受けてもらい、自己採点をするという形で行っているが、学生の関心はまだ低いと言わざるを得ない。今後本学学生の就職を控え、このような資格試験は有力な力となりうるであろう。教材の拡充に努める一方でPRに努めつつも学生諸君の今後の努力に期待したい。
- 教材に関しては、図書館からの委託という形で、LL自習室に教材を回してもらえ、学生もわざわざ図書館に行かなくとも自習室で必要な教材を見つけることができるようになりつつある。しかし、問題点としては、図書館から委託された教材の管理の問題があげられる。LL自習室ではバーコード入力できるような機材も揃っていないため図書館のような貸し出し業務は行っておらず、自習室内の利用は自由にできるが、管理面からすると難しい面がある。今後教材の数が増えてくることも予想され、この問題は深刻になるであろう。早急に図書館との連携を深め、管理・運営方法などの方策を考慮する必要がある。
- LL自習室と関連して、前稿で紹介した西南学院大学では、授業以外に学生がインストラクター（学生実習生）を勤めるLL語学実習講座を実施しておられる。本学でもこれに習って、LL実習という形で各資格試験の学習の手助けを学生自身にさせてはどうかと考えていた。学生実習生をアルバイトとして雇うことになれば、予算措置等の関係もあり、大学管理当局との話し合いも必要であるが、今年度は具体的な案もまとまらず交渉すらできなかった。また、インストラクターを勤められるだけの實力を持った学生をどのように育成するかという問題もあり、今後の継続課題として考えなければならない。
- 動機となるソフトの選定・購入については、昨年度のアンケート調査と利用状況の集計・分析の結果を考慮し行った。昨年度の分析から学生は、視覚に訴えるテレビやビデオを利用し、また利用したがつていることが分かった。それに対応して、映画のビデオ・LDなどを中心に選定・購入・収集した。現在、ビデオソフト、LDソフトを含め約900点にまで増えた。また、聴覚教材にも優れたものは多く、NHKの語学番組などを選定・購入・収集した。そして、図書館の協力を得て、各種資格試験対策のLL自習教材として、英検対策用の教材などを備えた。
- 英語以外の教材ソフトについては、昨年度学生からヨーロッパの言語についての要望が多かったが、機器の不足もあり、本学の特質から考えて今年度は中国語・ハンガル語・日本語を中心に揃えた。将来の語学学習ラボへの展望を考えたとき、ヨーロッパ言語の教材ソフトは不可欠であり今後充実させていきたいと考えている。
- 今後のソフト充実についての課題として、従来のテープソフト、ビデオ・LDソフトに加え、コンピュータの導入を考えるとコンピュータソフトの充実も図っていかなければならない。しかし、学習効果などを考え、どのようなコンピュータソフトを選定するかは、今後考えられている本学でのCALLシステムの研究成果などを参考にする必要はある。また、幸いにも今年度図書館の協力が得られたが、書籍についても充実していくことがLL自習室のライブラリーシステム化に不可欠である。

(ウ) スタッフの問題

- この課題については、予算上の問題から、今年度は解決に至らなかった。しかしLL自習室をライブラリーシステム化するためには、開室時間の問題や、貸し出し業務、ソフトの選定・購入・管理、機器の取り扱いなど多大な労力を必要とすることから、LL実習生の養成といった方法も含め、今後早い時期に解決策を見いだしたい。

(エ) 機器の充実の問題

- ビデオソフトの利用率が高く、VCR・モニター3セットでは学生の利用要求に応えきれなくなった。そのために大学管理当局にも考慮してもらい、VCR・モニターを3セット追加してもらった。また、既存のVCR・モニターのヘッドフォンジャックを2分岐できるように改善し、同一プログラムを同時に2人まで利用できるようにした。これにより飛躍的にビデオの利用が増えた。それと同時に、図書館にあるAV機器の利用も可能になり、自習室のビデオソフトを図書館に持ち込んで利用できるようにもなった。来年度以降もVCR・モニター等の導入は計画されているので、学生のますますの利用に貢献することが期待できる。
- ビデオソフトの提示用棚を新たに設置してもらった。これにより整理が容易になり、学生も利用しやすい

配置になったと思う。スティールラックであるため磁石とテプラーとを使って、整理している。これもまた矢野女史の尽力の賜物である。

- 学生用に2台のコンピュータの導入がなされた。導入からまだ2カ月足らずでソフトも充実しておらず、個人的なLL的利用にまでは至っていないが、現在LL自習室におかれた教材・ソフトのデータベース検索用に使用可能な形での提示をしている。学内ネットワークへの接続もされずスタンドアローンの状態であるので将来的には学内ネットワークに接続し、インターネットから学生が自由に電子メールなどを使って、国内外の大学間との情報のやりとりの場としてLL自習室を解放したいと考える。コンピュータ利用は今後ますます盛んになると思われるので、計画的な導入が望まれる。コンピュータ利用の具体的な事例・提案等は後の章に詳しく述べたい。
- 機器の充実については欲を言えばきりがない。現在の少ない施設をいかに効率的に活用するかという観点も忘れてはならない点である。現在の自習室のスペースの問題もある。このような点を考えあわせたくて計画的な機器充実を果たすべきであろう。しかし、現在の時代の流れの中で必要とされると思われるものは、最低限の数であっても導入を急がなければならない。その端的なものがコンピュータである。本学でもコンピュータ教室は存在し多数のコンピュータが導入されているが、語学教育用に設計されていないので、今後英語系で考えていこうとするものからすると主旨が若干異なり利用することが難しい。機器の導入に関して言えば、予算的な問題が大きいので大学管理当局との綿密な打ち合わせと計画が必要である。

(オ) その他

(i) ソフトの管理・運営、整理・分類・検索の問題

ソフトの管理・運営は、ほとんど利用する学生自身の手ゆだねセルフサービスで行っている。これには、学生の自主性を育てつつ自由な雰囲気を利用できるという利点があった。現在のところソフトの紛失など一件もなく、うまく機能していると思う。しかし、利用者の増加、ソフトの増加にともなって現在のままのシステムで将来続けるのは困難を究める可能性があるという課題も残った。この課題を解決するにはスタッフの問題や施設の問題なども絡み一朝一夕の解決は困難である。

次にソフトの整理分類には、本学独自の方法を採用した。書籍類はほとんどが雑誌なので雑誌ごとの分類、ビデオソフトはジャンル別の分類をして、独自の分類記号を付し棚に並べているだけである。ここでは、学生が実際に手にとって選択できるという利点を得た。が、データベースを使った検索の上でソフトを探す上では多少難しい面があるという課題も浮き上がった。

そしてソフトの検索には、コンピュータによるデータベースを構築するという方法を取った。コンピュータはアップルコンピュータ社のマッキントッシュを使用、カード型データベースソフト（ファイルメーカープロ）を使って管理している。この方法には、マッキントッシュを使用しているのはじめての学生も簡単に検索作業をすることができるという利点があった。また、ソフト購入の際、重複がないかをたちどころに調べることができる。だが、一方でデータベースの打ち込みに大変な時間を要するので少ないスタッフでこの作業をしなければならず購入時から学生が利用できるまで時間がかかりすぎるという課題がでてきた。

(ii) 英語の各教員同士のコミュニケーションを大事にすること

この問題は、教材・ソフトの選定・購入とも密接に関係している。英語授業の補完として学生がLL自習室を利用しようとした場合、授業に関連した資料がなければ補完のしようがないのは自明のことである。そのようなことのないよう常に個々の教員がLL自習室に要望される教材・ソフトなどの情報についてLL事務室のスタッフとコンタクトをとっておいてもらいたいものである。そうすることによってLL自習室の利用が活性化すると考える。また授業に直接関係せずとも学生の到達度に応じて教材のレベル等の情報が得られれば、学生に対して適切なアドバイスと共に教材ソフトの提示が可能になり、学生の英語力の一層の強化が期待できると考える。学生にとって時間数の限られる授業でのみ英語力向上が望まれるべきものではなく、授業以外での不断の努力が必要である。教員の方々には学生に対しても授業との関連において今以上にLL自習室利用の重要性を日頃から説いて欲しいものである。

3 利用実態—統計より

ここではLL自習室の利用実態を統計資料から分析し、考察してみたい。図表1から1993年度と1994年度を比較すると、本学の総学生数は約220名から約440名と2倍になっているが利用者数としてはあまり大差がない。これはLL自習室のスペースの限界があり、それが現れた数字といえよう。特筆すべきは7月から9月にかけての利用が増えたことである。7月の後半から9月いっぱいには本学では夏期休業期間である。それにもかかわらずほぼ毎日利用があった。これは学生の自主性の現れである。この学生の自主性をもっと引き出すためにも、LL自習室の存在価値はあると考える。ただ1993年度の前期はLLの授業で課題が課せられたこともあり、前期試験でもそれが問われたこともあって利用が著しく伸びているので比較の対象にはならない。1994年度は純粹に学生の自主性からの利用であり、どの月においてもほぼ一定の数字が得られ、LL自習室での自習がほぼ定着してきていることが読みとれる。

図表1

自習室利用状況報告書（1993年度）

月	開放日数	来室者数	利用合計時間	一回当たり平均利用時間	一日平均利用者数	一日平均利用時間
4月	12日	237人	181時間	46分	20人	15時間
5月	18日	305人	305時間	60分	17人	17時間
6月	20日	272人	300時間	66分	14人	15時間
7月	12日	283人	354時間	75分	24人	30時間
8月	22日	6人	22時間	218分	0.3人	1時間
9月	20日	25人	46時間	110分	1.3人	2.3時間
10月	20日	190人	193時間	61分	9人	9時間
11月	20日	177人	218時間	74分	9人	11時間

自習室利用状況報告書（1994年度）

月	開放日数	来室者数	利用合計時間	一回当たり平均利用時間	一日平均利用者数	一日平均利用時間
4月	20日	257人	322時間	75分	13人	16時間
5月	19日	199人	230時間	69分	10人	12時間
6月	22日	239人	307時間	77分	11人	14時間
7月	21日	120人	171時間	86分	6人	8時間
8月	23日	87人	150時間	103分	4人	7時間
9月	20日	91人	156時間	103分	5人	8時間
10月	20日	208人	270時間	78分	10人	14時間

4 コンピューター導入と今後の発展性

前項の機器の充実のところ述べてのように、今年度2台のコンピュータを導入することができた。機器は導入したが、様々な課題が残されている。

まず、教員がコンピュータを語学学習に利用して何ができるかを明らかにしなければならない。機械のみを与えたところで学生の語学力向上は望めない。そこでCALLシステムに関するプロジェクトを組んでの研究が必要になる。数人の教員で協議を重ねているが、具体的なプロジェクトとして発足していないので現在はアイデアの

交換に留まっている。早急にプロジェクトの組織が望まれる。

プロジェクトの発足に際して大きな問題がある。それは研究に必要なコンピュータの台数の不足である。語学学習の特質を考へてマッキントッシュの導入を前提にアイデアを出し合っているが、英語系の各教員のコンピュータに加えて今年度導入した2台のマシンしかない状況である。導入の計画はあるが、まだ実現するかどうか分からない。大学管理当局の援助も得て研究に必要なコンピュータの台数を確保しなければならない。

コンピュータを導入した時点での問題点として、学生は情報教育を通してキーボードには慣れているが、マッキントッシュの使用は練習していないので、LL事務室スタッフ等のオリエンテーションやサポートが必要になる。他のコンピュータに比べマッキントッシュは取り扱いが簡単ではある。しかし、現在の状況ではスタッフの時間的制約もあり、常時学生の質問に答えるという事はできない。台数が少なければ何とか現状でもできないことはないが、将来コンピュータの導入台数が増えてくるとコンピュータの技術面の知識を持ったスタッフの増員が必要になる。また学生がマッキントッシュになれてくれば話は変わってくるが、そのためには情報教育でも現在使用している機種以外の機械(マッキントッシュ等)にも触れる教育を目指すべきではないか。

現在考えられる利用法としては、既存のソフトをできるだけ揃え、学生に使用させる。そのうえで進捗状況や成果などのデータを取ったり、アンケート等をこまめに実施する。それらのデータをもとに本学独自のコースウェアの研究開発を行っていく。コースウェアの研究開発には時間を要するが、マッキントッシュに付属しているハイパーカードというオーサリングソフトを利用し、簡単なものから出発し、学生に使用させてデータを取って改良していくことは可能である。

LL自習室に導入したコンピュータをスタンドアロンで使用するよりもネットワーク環境の中に位置づけることによって、コンピュータの語学学習への利用は可能性を広げられる。幸い本学のネットワークは、インターネットを通じて国内外の大学間の通信が可能である。電子メールを使って海外の学生とコミュニケーションする事を簡単に実現できる。1994年度語学ラボラトリー学会(LLA)の全国研究大会の発表においても大阪女学院短期大学の加藤映子氏の発表を始め、いくつかなされていた。加藤氏の発表では、電子メールという文字メディアのみならず、学生が自主作成したビデオ画像を、*(注1)クイックタイム(QuickTime)という技術を利用してデジタルムービー化し、海外の大学学生と交換する事を通して学生間で批判しあひ議論が深まっているというものであった。日本人学生が自主作成した日本文化に関する映像に英語でコメントをつけ、その英語には日本人教師は手を加えず直接海外の学生の批判を仰ぐといった形を取る。海外の学生のコメントには鋭いものもあり、日本人学生にとっては刺激になっているとのことであった。この方法を採用することによって、authenticな英語に触れることも可能になる。リアルタイムに多量の情報を双方向コミュニケーションするというコンピュータの新しい利用法を示してくれたものとして特筆したい。

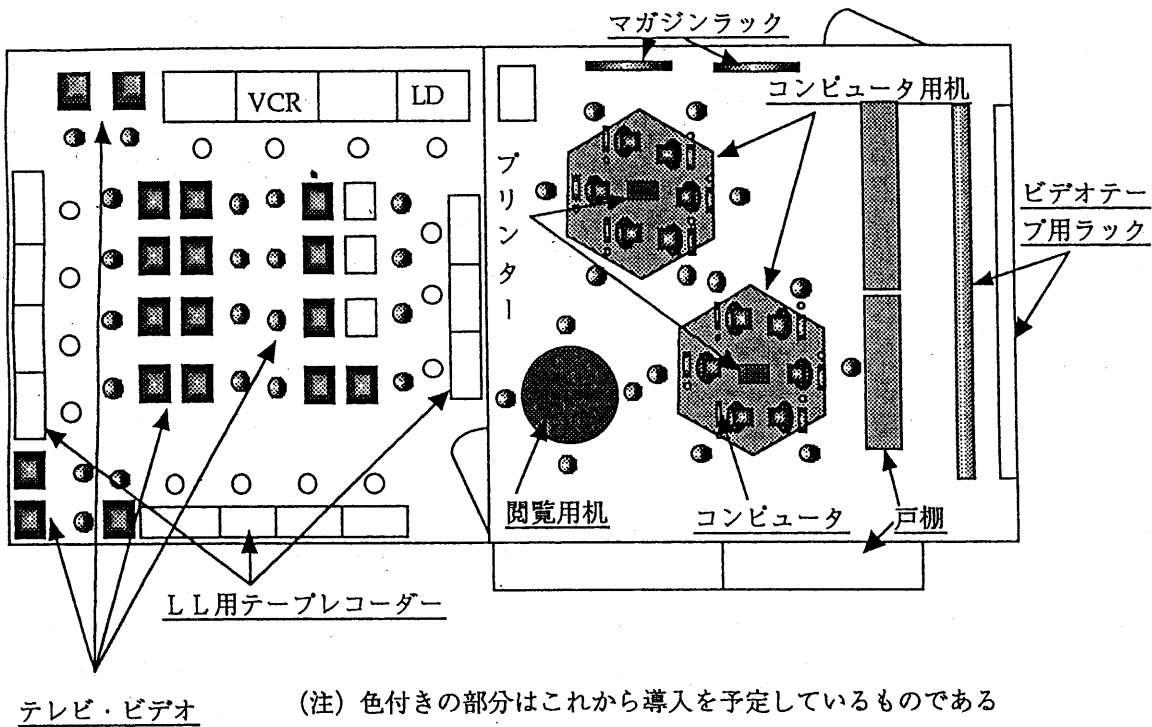
ここで筆者が強調したいことは、従来のLLの単なる延長上のメディアとしてCALLシステムを考えるのではなく、自己発信或いは双方向的コミュニケーションの手段としてのコンピュータ利用を目指すCALLシステムの開発である。この広い意味でのCALLシステムは米国の大学では当たり前のことになっているが、日本においてはまだ導入段階に過ぎない。コンピュータの通信面に重点を置いた利用法を導入し確立することが、国際文化学科を持つ本学の教育には必要欠くべからざるものであると確信する。

LL自習室へのコンピュータの導入は試験的段階であり、その有用性が明らかになり次第語学センター等の設置を考えるべきである。アメリカのほとんどの大学でIBMやマッキントッシュコンピュータを数十台設置したラボが2~3室あり、ドミトリーにも24時間学生が使用可能なラボがあるという現状から考えても、現時点から計画しておくことが必要である。

現在考えているLL自習室のレイアウトを参考までにあげておく。この様な形で、小コンピュータラボとしてLL自習室が機能することができれば、将来「語学学習センター」が出来るときのワンステップになるに違いない。具体的な「語学学習センター」構想はないが、今後大学教育の中で重視されるに違いない施設であると考えらる。

図表2

LL自習室予定配置図



5 課題と展望

以上の考察をまとめると、昨年度からの継続課題も含めて、次のようなことが今後の課題としてあげられる。

(1) LL自習室の利用法を学生に周知徹底させること

これは昨年度来努めて来たことではあるが、懸案の「LL自習室利用法の手引書」は、この目的のために大変有効なものとなるであろうから、ぜひ実現したい。「LL通信」についてはその次の課題となるだろうが、新しく入った機器やソフトウェアの広報だけでもできれば、と考えている。

(2) 学生が、語学修得及びLL自習室の利用に対する動機・目標を明確にすること

まず、学生の意欲に応えるソフトウェアを整備することが必要である。現在、学生の利用状況を鑑みて、視覚に訴えるテレビ・ビデオが学生の興味を引いていることから、そうしたソフトを積極的にそろえている。さらに、学生から要望のあった英語以外のヨーロッパ言語のソフトも用意していきたい。

また、個々の学生の到達度・語学レベルを把握して、その要望に応えるソフトウェアを用意しなければならない。学生の要望と利用実態を把握するためのアンケート調査は今後とも継続する予定である。

今後の展望としては、LL自習室には語学学習用のあらゆる種類の書籍も不可欠であるし、またコンピュータの導入を見込んで、コンピュータのソフトについても、どのようなものが適当であるか検討していきたい。

(3) スタッフをそろえること

これは予算の問題もあり、大学管理当局との検討が必要であるが、早急な対応が望まれる。

(4) 機器の充実

コンピュータは、最低限の数は導入し「語学学習センター」のパイロットとしたい。そのためには当然だが、単に機器を入れるだけでなく、その利用方法についての研究が必要となってくる。

どの機器も、効率的に用いてこそ活きるものであるから、利用状況等をよく検討し、さらに効率のよい利用法も考えた上で設備の充実を考えていきたい。

(5) ソフトの管理・運営、整理・分類・検索等

スタッフの問題が解消されるまでは、現在の人員で運営していかなければならないが、その負担は過大なもの

となっている。今後さらに、図書館から借り入れているソフトの管理など、業務は増える一方である。サービスの低下は避けたいが、ソフトのデータベース作りの簡略・省力化等の業務の効率化は図る必要がある。

(6) 英語の各教員同士の連絡を密にする。

教材・ソフトの選定・購入の際に授業の補完を考慮するために、またLL自習室の利用を機会をとらえて、学生に啓発してもらうためになどLL事務室と各教員同士との連絡は、密にして学生の英語力強化に努める必要がある。

(7) 利用実態調査のためのアンケートの実施

アンケート調査を継続して、学生の利用実態を把握していくことはLL自習室の運営にとって重要である。どのような環境を整えれば、学生にとってより有用であるかを知る手掛かりとして継続していきたい。

(8) コンピュータの導入

自己発信或いは双方向コミュニケーションの手段としてのコンピュータ利用を目指して、コンピュータの導入を計画・進行させていく必要がある。

LL自習室を管理・運営する者として、学生がLL自習をするうえで最適な環境を整備していかなければならないのは言うまでもないことである。しかし、その実行となると、人材面、時間面、予算面とさまざまな問題が浮かび上がってくる。業務をその効率化を考えながらしていくことが必要である。

また、こうした状況のもとでは、学生が受け身的ではなく、主体的、積極的なLL自習室の利用をすることがより望まれてくる。LL自習室の運営に努めながら、学生の主体性を引き出すことにも絶えず注意を払いたい。

コンピューターの導入は、時代の要請とも言えるが、コンピューターを自己発信、或いは双方向コミュニケーションの手段として利用するならば、幅広い英語語学力とともに、学生の主体性をも喚起する可能性は高い。コンピューターの導入を、語学学習の有効な手段としてとともに、学習者の自主性・主体性を呼び起こすものとして発展させていくことが、今後の課題であり、展望とも言えよう。

最後になったが、本研究は宮崎公立大学教授笹谷孝氏の助言・指導を受けながら、宮崎学術振興財団の助成金を受け進められたことを明記し、感謝するものである。またLL自習室の管理・運営に尽力し、管理方法・運営法についてのアイデアを提供していただいたLL事務室の矢野町子さんにもこの場を借りて感謝するものである。

* (注1) クイックタイム (QuickTime)とはアップルコンピュータ社がMacintosh及びWindowsマシン向けに開発した、動画を含む各種メディアをコンピュータ上で自由に統合するためのソフトウェア技術である。

参考文献

- 山内豊 (1994) 「英語教師の重装備--1993年度LL設置高校への全国調査をふまえて--」『現代 英語教育 1994年9月号』 研究社, pp. 17--19.
- 町田隆哉 (1991) 「LLとCALL」『コンピュータ利用の英語教育』, メディアミックス, pp.39--50.
- 町田隆哉 (1991), 「CALLラボの展開」『コンピュータ利用の英語教育』, メディアミックス, pp.120--124.
- 野澤和典 (1993), 「CAI/CAL/CALL/CALLLとは何か」『コンピュータ利用の外国語教育』, 英潮社, pp.2--10.
- 野澤和典 (1993), 「ネットワーク化された自学自習用CALLシステム」『コンピュータ利用の外国語教育』, 英潮社, pp.143--150.
- 尾関修治 (1993), 「ハイパーメディア教材における学習履歴の記録とその利用」『コンピュータ利用の外国語教育』, 英潮社, pp.12--23.
- 杉浦正利 (1993), 「外国語学習に必要な情報とハイパーメディア」『コンピュータ利用の外国語教育』, 英潮社, pp.125--134.
- 北尾謙治 (1993), 「アメリカにおけるCALLの動向」『コンピュータ利用の外国語教育』, 英潮社, pp.201--208.
- 加藤映子 (1994), 「QuickTimeを利用したマルチメディア英語教育の試み」『第34回全国研究大会発表論集』, 語学ラボラトリー学会 (LLA), pp.75--78.
- Yamauchi, Yutaka (1993) "Sequence and Feedback in Constructing a CALL System: Description of a Multimedia CALL System for Improving and Diagnosing Learners' English Listening Skills." Language Laboratory 30, LLA, pp.77--93.
- Brown, J.D. (1992) "Technology and Language Education in the Twenty-First Century: Media, Message, and Method." Language Laboratory 29, LLA, pp.1--22.
- Dunkel, Patricia (1991) "The Effectiveness Research on Computer-Assisted Instruction and Computer-Assisted Language Learning." Computer-Assisted Language Learning and Testing, Newbury House, pp.1--36.
- Chapelle, C. and Jamieson, J. (1991) "Internal and External Validity Issues in Research on CALL Effectiveness." Computer-Assisted Language Learning and Testing, Newbury House, pp.37--59.
- 竹野茂 (1993), 「本学LL自習室のライブラリーシステム化～先進校の実態調査をふまえて～」『宮崎公立大学人文学部 紀要 創刊号』 pp.67--85

インターネット, マルチメディアの動向については, 以下の著述が読みやすく参考になる。

西垣通 (1994), 『マルチメディア』, 岩波書店, 岩波新書

月刊マックライフ編 (1994), 『インターネットの世界』, BNN

